

蕨取りの遺恨

四十年ばかり前のこと、横山のもの、川上の布里という村の山へ、春、蕨取りに行くと、その村の者がかねて待伏せして、採った蕨は全部押収して、各自持っていた吠（かます）までも取り上げて追い返したことがあったそうですが、それは蕨取りが山を踏み荒らすので、その村で最後の手段としてやったのだそうです。ところがその年の夏、洪水があって、布里村の有力な材木商の材木が流れ出して、横山の村へも、たくさん打ち上げられたのを、後になって受け取りに来ると、春の蕨取りの遺恨があるので、村の地内へかかった材木は、一本も手を触れさせないと頑張ったので、その材木商が村へ帰って、村のものと協議した結果、翌日になって、春の頃押収した吠に饅頭を一包ずつ添えて、横山の各戸へ詫びを入れて返したので、無事落ち着いたと言う話がありました。



寄木

鮎滝から二百メートルほど上流で、寒狭川が大きく曲がっているところを寄木と言います。友釣りの穴場なのですが、洪水の時、水が出れば出るほど、横山側で大きく渦を巻いて、水が引いた後は、材木が山のように溜まっています。

この話の材木も、この寄木に打上げられたと思われま

蕨が結びつけた縁

明治十五年頃のことだそうですが、鳳来寺村字門谷の布袋屋と言う大きな宿屋の娘が、横山の字追分の隠居所へ遊びに来ているとき、ある日女中を供につれて蕨取りに出かけると、近くの掘っ立て小屋にいた重吉というものの倅が道案内をするといって、椎平というところの板橋を渡るとき、その倅が手を引いて半分渡りかけると、雨上がりで水勢が増していたので、娘が眼が眩んで、あっとよろけたのを、抱き留めようとする間に、二人とも溺れてしまったと言います。どちらもまだ十三の春を迎えたばかりの子供で、間もなく数町の川下

で発見された時は、はたで見る眼も哀れなほど、しっかり抱き合って死んでいたと言いました。男の方がひどい貧乏人の倅なのに、娘の親はその頃附近に時



めいた家だったので、とかくの噂を厭って、よく朝早く葬式を出そうとしたところが、何かしらのさまたげが出来て、日の暮れになったと言いますが、棺が家を出るから葬るまで、二人の葬式が、申し合わせたように、寸分違わぬ時刻になったと言いました。

椎平橋

当時の板橋は橋脚下の岩盤に架かっていたと思われます。